

特集「インタラクション技術の原理と応用」の編集にあたって

大野 健彦†

本特集は、2006年3月に学術情報センター橋記念講堂で開催されたシンポジウム「インタラクション2006」(実行委員長:宗森 純,プログラム委員長:大野健彦)に連動した企画である。「インタラクション」はヒューマンインタフェース研究会,グループウェアとネットワークサービス研究会,ユビキタスコンピューティングシステムの3研究会の主催で開催されており,採択率が40%を下回る厳しい査読を経た論文発表,70件を超えるデモンストレーション(インタラクティブ発表),および70件以上のポスター発表から構成されている。いずれも好評で,インタラクション2006では600名を超える参加者を集めるまでに発展してきた。当該研究分野は進歩が早いことから,タイムリーな論文化の機会を提供することが非常に重要である。そこでインタラクション2006の開催時期にあわせてインタラクションの特集号を組み,インタラクション2006における発表論文および関連研究を広く集め,速やかに公表する機会とした。また,この分野は幅広い分野にまたがる境界領域であり,価値観が多様化していることを受け,論文はインタラクションに関する基礎原理から応用分野までを広く対象として募集することとした。

本特集はゲストエディタ制により,下記の特集号編集委員会の責任で編集を行った。ゲストエディタにはインタラクション2006のプログラム委員長をつとめた大野(NTT)が就任し,編集委員にはインタラクション2006の主要プログラム委員が就任した。投稿された各論文は,編集委員がメタレビューを担当し,各編2名(テクニカルノートは1名)の査読者による並列査読の報告に基づき,メタレビュー処置案を作成し,特集号編集委員会において慎重に審議の上,採録/不採録/条件付き採録を決定した。投稿された論文は90編(うちテクニカルノート2編)であった。査読者,編集委員,および照会に対応していただいた著者のご尽力により,最終的に33件の論文が採録となった。採択率は37%である。結果として投稿数,採録数ともに

予想を大きく上回った。近年,インタラクションへの発表申し込み件数が大幅な増大傾向を見せていることと相まって,シンポジウムとそれに連動する特集論文が広く認知されてきたためと思われる。なお,第2回編集委員会において,2件の論文について特例処置として設けられた2回目照会を実施した。これらは,内容は優れているものの,採録条件を十分に満たしていないなどの理由から,そのままでは採録が困難な論文であった。著者修正の結果,いずれも適切に修正されており,論文として十分な水準に到達していることから採択とした。スケジュールが緊迫しており,著者,編集委員の両者に大きな負担をかけることになったが,特例処置を有効に活用することができた。

採録された論文の分野は多岐にわたり,基礎分野から様々な応用分野まで幅広く集めるという目標は達成されたものと思う。これも,著者の方々,査読者,特集号編集委員,ならびに学会事務局の皆様のご尽力によるものであり,深く感謝いたします。

「インタラクション技術の原理と応用」特集編集委員

- 編集長
大野健彦(NTT)
- 編集幹事
河野恭之(奈良先端大)
細部博史(情報学研)
- 編集委員
青木 恒(東芝),五十嵐健夫(東京大),市村哲(東京工科大),稲見昌彦(電通大),江渡浩一郎(産総研),葛岡英明(筑波大),楠 房子(多摩美大),竹内勇剛(静岡大),椎尾一郎(お茶の水女子大),角 康之(京都大),福本雅朗(NTTドコモ),増井俊之(Apple),宗森 純(和歌山大),中小路久美代(東大/SRA-KTL),西本一志(北陸先端大/ATR),野間春生(ATR)

† NTT 第二部門
NTT Department II